

【Session 2-1】

身体での共創表現

西 洋子

1 表現する身体

私たちは、普段の生活の中で、意識するしないにかかわらず、自分のからだでいろいろなことを感じ取っている。例えば、周囲にあるモノの色や形、空間の明るさと暗さ、自己を取り巻くさまざまな音、温度や湿度、空気の流れや匂い……。からだは、自分が生きている環境を感じ取るセンサーとなっているわけである。身体が受け取るこうした情報は、個々バラバラに感知されるわけではなく、自分自身の心の状態とも相まって、まとまりのある“ひとつの感じ”として自己の内側に現れ、自身の振る舞いにさまざまに影響を与えている。一方で、私たちは、からだを通してその時々自分を表現している。どのように立っているのか、どちらを向いているのか、どんな視線をつくりだしているのか、腕や手や指はどう動いているのか……。特に意図するわけではなくとも、からだそのものと動きのひとつひとつは、瞬間ごとの自己を外の世界に向かって表現している。このように考えてみると、生きているということは表現し続けることであり、“表現する身体”こそが、自己の内と外とをつなぎ合うはたらきを担っているとも言えそうである。

人は本来、からだを通して世界と出会い、周囲のさまざまないのちと相互にかかわり合い、直感的につながり合うことのできる存在なのであろう。一方で、こうした身体の視点から私たちの日常を省みるとき、身体の感覚によって外部世界を取り込み、からだで表現することで内部世界を解き放つといった“表現する身体”の循環的なはたらきそのものが、少しずつ鈍くなっているのではないかと思うことがある。

例えば、現在の私たちに快適な生活をもたらす人工的な空間は、夏の日汗っぱいであそんだ後に全身が感じる爽快感や冷たい水がのどを通る瞬間の清涼感を弱め、冬の日ひたひたの白い息で体感する内と外との交流の感覚や、氷の張った水が指先に与える尖った感触を奪ってしまう。周囲の自然が乏しくなると、陽の光を浴びて季節や時間とともに移ろう景色を眺める楽しみが薄れ、身体に流れる主観的な時間は、均質に刻まれていく物理的な時間に吸収されてしまうかのようなのである。都会の明るい夜は、空っぱいに広がる星を見えない世界に追い込み、闇に抱かれて輝く星空を眺めるときのような、全身

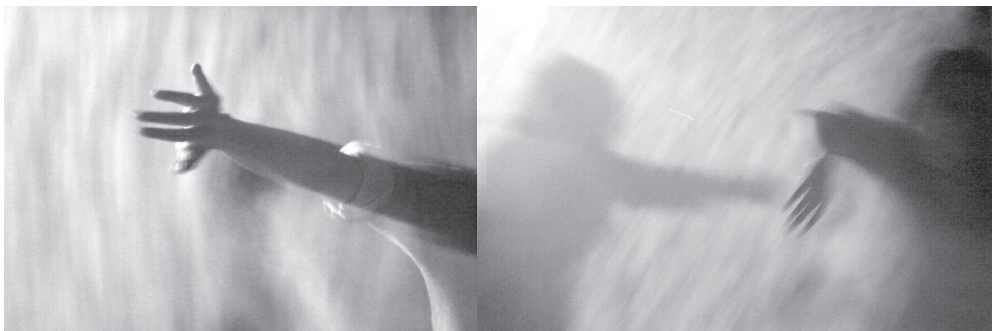


写真1 表現する身体：フォグスクリーン（早稲田大学・三輪敬之研究室）を使った身体の対話

が無数の光に包まれる感じを日常の中で経験することは叶わない。都市化した生活の中で、生活をともにする他者が少なく均質になると、からだで感じる多様性の幅が狭くなり、個性を磨く術が育ちにくくなる。このように、人為的につくられた環境や操作された情報に取り囲まれて過ごす日々においては、これまでは当たり前だった身体的経験は、否応なく静かにもぎ取られていくかのようである。そんな、人を取り巻く環境の変化と時代の空気そのものが、私たちの身体的な感性を鈍らせているとしたら、いのちを感じ合い伝え合う営みにとっては、とても深刻な問題であるといえるのかもしれない。

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです (Rachel Carson 1956)。

『沈黙の春』の著者であり、海洋生物学者のレイチェル・カーソンは、子どもが五感を通して自然と出会う大切さを説き、「知ることは感じることの半分も重要ではないと固く信じています」と語る。子どもが世界と出会う際に、全身から湧き上がってくるセンス・オブ・ワンダーは、対象への知的興味を喚起すると同時に、見える世界の奥行きに見えない物語の存在を感じ取る力をも養ってくれる。しかしながら、現代の日本に暮らす私たちの身体の感性は危うく、大人ばかりか子どもも同様であると思うのである。

2 からだで表現する試み

“表現する身体”のはたらきに気づき、身体そのもののもつ柔らかさを少しでも取り戻すことができるように、私自身は教育や療法の現場、コミュニティで、さまざまな人々がからだで出会い共に表現を創り合う活動を継続している。例えば幼稚園や小学校で、博物館や精神科入院病棟で、子どもや大人、男性や女性、障害のある人やない人……こうした人々を対象に、いまこの瞬間に心が感じていること、これまでに見た風景や出会った人々とのあいだに芽生えたさまざまな感情、それらを見つめ思い起こしながら、からだの動きに託して外側へと送り出す、そんな創造的な身体表現を試みる活動を続けてきた。以下ではまず、こうしたワークショップの場で実際にどのようなことを行っているのか、その一部を簡単に紹介してみたい。



写真2 からだでの「送る～受ける」

①からだでの「送る～受ける」(写真2)

からだを介した「送る～受ける」というシンプルで大切なやりとりが実感できるように、また、そこから、新しい表現が生まれることを願って、お互いに手や指を合わせ、そこを基点に自由に表現を創り合う活動を行ってみる。最初は、「送り手」と「受け手」というように、それぞれの役割を固定して、自分の思いを相手に送り、相手の思いを受けるように動いてみる。身体的な感性を研



写真3 モノになって動いてみる（保育者養成課程での授業の様子）

ぎ澄ませて、相手のメッセージをからだで受けながら、即時的に自分の動きで応答していく……、からだならではの「送る～受ける」を通して、創り合う世界の豊かさを感じとることができればと思う。

②役割を固定せずに、自由に表現を創り合ってみる

①の活動に慣れてきたら、今度は役割を決めないで、即興的に表現を進めてみる。だんだんとからだでのやり取りが細やかになって、「送る～受ける」の関係性を超えた“私たちの表現”と感じられる瞬間が立ち現われてくるようになる。一方で、ズレてしまったり、それを立て直そうと、さらに丁寧に「送る～受ける」を繰り返したりと……さまざまな場面がダイナミックに展開していく。こうした世界が共有されると、それぞれの内側では自然にいろいろなイメージも湧き出て、そんなイメージに誘われながら、新たな表現が持続的に生まれはじめる。

③モノになって動いてみる（写真3）

2人組になって、一方の人が新聞紙や布を動かし、他方の人はそのモノになって動いてみる。縦になったり、横になったり、ふわっと空中に舞い上がったり、ガサガサと揺らされたり……自分が受けとった紙や布の様子をそのままからだで表現することを試みる。夢中でモノに変身している人の動きはとても自由であるが、一方のモノを動かしている側も型にとらわれない独自の表現を行っている。人を模倣する場合とは異なる抽象度の高い媒介物（紙や布）を即興的に動かし、からだを感じたままを表現することで、動きやイメージに対するとらわれから解放されて、からだで表現する心地よい世界にスムーズに入っていくことができる。

④動きを音で表現する

先の2人組に、もう一人が加わって、紙や布を動かす人、モノになって動く人、その感じを簡単な楽器を用いた音で表現する人、それぞれの役割を順番に体験してみる。③でモノになって動くことを経験しているので、音の表現も自分のからだの内側から生まれる感じがする。それぞれのからだや動き、モノや音が一体化した“分けない世界”の一端をからだで感じるができる。

こうした“表現する身体”への具体的なアプローチを通して、人と人とはどのように出会い、つながり合っていくことができるのであろうか。現実の社会の中でこの課題を問いかける試みのひとつとして、1998年から今日までコミュニティを基盤とする『みんなのダンスフィールド』(Inclusive Field for Dance)という実践的な活動を展開してきた。以下では、その活動を紹介しながら、身体での共創的な表現を試みる際の困難さや可能性について考えていきたいと思う。

3 からだで出会う

1998年、車いすの子ども3人と車いすではない子ども3人がはじめて出会い、一緒にからだで表現する試みをはじめた。男の子や女の子、大きなからだや小さなからだ、麻痺のある動きやなめらかな動き、それぞれのからだや動きが異なることで新鮮な出会いが生まれ、“みんな”が共に在ること、つながり合うことで表現の可能性がひらかれていく……そんな夢は抱くものの、全てが手探りでのはじまりとなった。

自分とは大きな差異のある他者と出会う子どものころには、不安や戸惑いが渦巻き、言葉を交わすことはもとより、お互いに近づくことさえためられる様子であった。大きな男の子の車いすが向かってくると、小さな女の子はどう対応してよいのかわからず、思わず後ずさりする場面も見られたほどである。表現を創る過程では、からだで直接かかわることが必要となる。促されてつないだ手は麻痺やこわばりを感じ、はじめての感触にざわつく心の波は、瞬時に相手へと伝わってしまう。立っている相手とどうかわればよいかわからず、周囲を自在に動く勢いに圧倒されて呆然とするからだには、他者を受け入れる余白などない。子どもたちと私は、“からだは嘘をつかない”ことと“からだで嘘はつけない”ことの重さを学び、それでもなお、私たちなりの表現を見つけだそうと、ありのままの自己を送り他者を受ける試みを続けていった。一方で、表現を語り合う際には、麻痺のある子どもの言葉が聞き取れなくて、本人も周りもごまかしたり誤解したり……。お互いが精一杯の配慮をしてもなお、心痛む出来事が起こる状況は、人と人との出会いの難しさと、共創の場でのからだや言葉のコミュニケーションの脆さを教えてくれるものとなった。だからこそ、わずかでも「つながった」と感じた瞬間の喜びは、からだの記憶として深く刻まれ、今でも鮮明に蘇ってくるのである。

4 気づきとつながり

こうした出会いから12年あまり、『みんなのダンスフィールド』の活動は、現在では50名ほどのさまざまな“みんな”が集う場となった。子どもや保護者、学校の先生や研究者、教育や福祉を学ぶ学生たち、ダンサーや地域の人たち……。継続して活動するメンバーの他に、回ごとに訪れる人も加わっての活動は、誰もがたったひとつのからだで存分に自己を表現し、共に表現を創ることで他者の存在と個性に気づき合うことを目指している。そんな中でも、はじめてフィールドにやってくる子どもの、特に障害のある子どもに付き添う保護者の方は、わが子が集団に馴染めるかどうか、体育館を自由に動く仲間についていけるかどうかと、片時も子どもから視線を離すことがない。周囲にはいろんな子どもや大人がいて、それぞれが長短の糸をつむぎ合うようにさまざまに出会い、かかわりを築いているが、そんな



写真4 『みんなのダンスフィールド』の活動風景

当たり前光景に気づき、この場に自己を位置づけた穏やかな眼差しが生まれるためには、しばらくの時間が必要となるのである。射るような緊張した視線を我が子にだけ送っていた母親が、若いメンバーに誘われてしぶしぶと立ち上がり、手と手を合わせてからだを動かさしはじめると、他者と交流するからだは、ゆっくりと主体を取り戻し、やがて、生き生きとした眼差しが共に表現する仲間と交わされるようになっていく。一方で、そんな風に自己を表現しはじめた母親の姿を遠くから眺める子どもは、我が事にも増して嬉しそうで、同時に、普段の母子の関係とは逆に、少し心配そうに母を見つめる。個を超える新しいつながり……、それぞれの眼差しと思いが私たちの現場^{フィールド}に生まれ交わされるとき、放たれる光に照射されて、みんなの表現は輝きを増していくのである。

5 共にあること

「車いすの子どもたちががんばっている姿に感動し、涙がとまりませんでした」

『みんなのダンスフィールド』のパフォーマンスを見てくださった方が、こんな感想を寄せてくれる。子どもたちは、「ありがとうございます」と頂いた言葉に感謝しつつ、メンバー同士が視線を合わせて「私たちは、みんなで表現を創っています」と応じる。このフィールドでは、年齢や性別、からだの大小や障害の有無に関わらず、すべての人が自分のからだで自由に創造し、共に表現を創り合う活動を行っているからである。だから、子どもの中には、こうした感想に、きょとんとした表情になる子もいる。

「自分の涙の意味について、考え込んでしまいました」、ある方が私にこう語った。自分の中に障害への差別や偏見があり、そこからでた涙ではないかとの疑問がわいてきたそうである。自然な感情の意味を内側から見つめ直す作業は、決して容易ではない。涙の意味を確認しようと、再度、私たちのもとを訪れる方もある。やがて、揺れ動いた感情は、人と人が“いま・ここ”に“共にある”自然な姿への根元的な共感なのだという気づき生まれたそうである。「みなさんの表現の場に入り込み、私も、みなさんと一緒にそこにいる感じがするのです」と穏やかに話してくださった。

6 身体での共創表現～包みつつ・包まれる、包まれつつ・包む～

共創へと向かう表現の現場では、人と人が“いま・ここ”に“共にある”実感を、創り合う表現を通してからだから感じる瞬間があることを大切にしなければならないと思う。その時、自己の内側から、自ら生きた時間が紡がれていくのではないだろうか。

いま、社会や教育の中では、つながりや絆が大きくクローズアップされている。人と人が、自然と人が、生命と生命が出会い、関わり合い、つながり合って“共に生きる”ことの困難さに直面しているからなのであろう。そのことは、個々の主体性と、異なる者同士の共同性をどのように成立させていくか



写真5 それぞれのからだで共に創る

が大きな課題となっていることをも示してもいる。主体が強すぎて他を排除する、あるいは共同に主体が埋没してしまう状況は、共創とは遠い感じがする。矛盾した比喻ではあるが、自分自身と共同で創り合う表現との関係は、“包みつつ・包まれる、包まれつつ・包む”という身体感覚として、ゆっくりと、しかし確実に感じられるものではないかと思う。むしろ、私たちの身体がこうした二重性を“創り合い”“感じ合う”強さと柔らかさをもっているからこそ、共創としての身体表現は、単なる“包摂”にとどまらず、より広がりのある価値となる可能性を秘めていることであろう。

それぞれのからだや動きが異なることで新鮮な出会いが生まれ、“みんな”が共に在ること、つながり合うことで表現の可能性がひらかれていく……

表現を“いのちの営み”と広く捉えるとき、“表現する身体”の現場での私たちの小さな試みは、いのちを内と外とに響かせ合い、他者と重ね合わせながら新たなメロディを奏でることにつながっていくのではないか……そんな夢を抱くのである。最後にこうした世界の豊かさを予感させる詩を紹介して、本稿を終えることとする。

生命は 吉野 弘

生命は
 自分自身で完結できないように
 つくられているらしい
 花も
 めしべとおしべが揃っているだけでは
 不十分で
 虫や風が訪れて
 めしべとおしべを仲立ちする
 生命はすべて
 そのなかに欠如を抱き
 それを他者から満たしてもらうのだ

世界は多分
 他者の総和
 しかし
 互いに
 欠如を満たすなどとは
 知りもせず
 知らされもせず
 ばらまかれている者同士
 無関心でいられる間柄
 ときに
 うとましく思えることさも許されている間柄
 そのように
 世界がゆるやかに構成されているのは
 なぜ？

花が咲いている
 すぐ近くまで
 虻の姿をした他者が
 光りをまとって飛んできている

私も あるとき
 誰かのための虻だったろう

あなたも あるとき
 私のための風だったかもしれない

〔付記〕

本稿は、以下に加筆修正を加えたものである。

西洋子「新しいつながりーからだの表現の現場から」、『アンジャリ』、Number18、親鸞仏教センター、2009。

西洋子「いまこそ、共に生きていく『インクルーシブ体育』の実現を」、『体育科教育』、2月号、大修館書店、2010。

引用文献

Rachel Carson 1956 *The Sense of Wonder* 1996 『センス・オブ・ワンダー』 p23 上遠恵子訳 東京：新潮社
 吉野弘 1999 『吉野弘詩集』 東京：角川春樹事務所